

---

# とある王国に巡る運命(もの)

雨音 流歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある王國に巡る運命<sup>もの</sup>

### 【著者名】

NZマーク

### 【作者名】

雨音 流歌

### 【あらすじ】

かつて在ったといふ戦乱が嘘のように安穏そのものの国、虹霓<sup>こうねい</sup>。国を統べる王族を筆頭に、討魔士<sup>とうまし</sup>・呪術師<sup>じゅじゅつし</sup>・龍使<sup>りゆうつかい</sup>・調薬師<sup>じょうやくし</sup>・万獸使<sup>ばんじゅつかい</sup>など数多の才知に長ける人々がそれぞれ集団を作つて生活しているこの国で、もうじき今年度の全部族交流会が催される。

それは、歴史の循環<sup>サイクル</sup>が巡り戻ってきた日でもあった。  
「さあ、始めましょうか」



「いつまで隠れてるつもりかな。私、早く帰つて寝たいんだから手を煩わせないでくれない？」

それだけ言うと、少女は自分の半身くらいの長さはありそうな刀を床板に突き入れた。

「あ、あの…」

「おじさん、心配しないで。この床板つて結構頑丈みたいだから、ちょっとやそつとじや家崩れたりしないよ。」

この家の家主である中年の男性にやや的外れなフォローを入れる少女。普通ならここで「このクソガキが。人の家に傷付けといふざけたこと抜かすんじやねえ」とか言われかねないが、運良く男性は穏和な性質らしく、「寝室は破壊しないでおくれよ」と言った他は、若干固い笑顔で黙つて状況を見守つてくれている。とりあえず親父からの鉄拳（手刀だつたり刀の鞘だつたり、バリエーシヨン豊富）は回避が決定したらしい。本当に良かつた。あれは本当に痛くて、そのうち頭の形が変わってしまうんじゃないかな…と割と本気で考えたりしてしまうほどだ。安堵のため息に併せて突き入れた刀に両手を添え、力を込めると同時に横方向に搔つ切る。

数秒間の不気味な間の後、真っ黒い大型の鼬みたいたいな妖魔が軒下からヌツと顔を出した。

「よし、来たな」

紅い瞳でジッと視線を向けてくるそれに挑発的な笑みを返し、

「よ…っ」

華麗な空中回転で外へ躍り出、ポケットから笛を取り出す。妖魔の

氣を引き、この家のから離そうといふ作戦だ。程無くして高い音で笛が唄い始める。と、予想通りすぐに妖魔がこちらを向いた。

「おーい、こっちだよー」わざとらしい声で呼び、少女は家の裏手にある森林に向けて悠々と歩き出す。すると妖魔は低く唸り声を漏らし

追い風でも受けたかのような物凄いスピードで向かつてきた。しかし、少女がそれしきの事で動じることはない。

「そつそつ、全力で来てくれなきゃ面白くないよ」

『達観』という言葉がよく合う、少しの乱れもない口調と表情、搖るがない眼光で前を見据えたまま呟く。少しだけ少女は歩みを止め視線を上げた。それは注連縄を張った一本の大木。

「…………他者に手助けして貰うのは好きじゃないけど、仕方ないか……」

ため息と一緒に腰のベルトに引っ掛けっていた鞘から、今度は小刀を抜き取る。これは斬撃に用いるのではなく、妖魔の浄化用に打たせた、特別な刀だ。

「退治屋、夕紀の名の元に命ず。神宿る樹、その体に秘める淨めの御力、我が内に貸し添えよ。」

少女　夕紀はつくりとした口調で呪詞を唱え、小刀をかざした。

すると、白い刀身が紅と朱色を混ぜたような色の光に包まれた。網膜に鮮明に訴えてくる光に目を細める。しばらくすると光は細くなつてゆき、やがて完全に消えた。そして、それと同時に妖魔の爪が空を引っ搔く音が。

「つまつと……」

瞬時に左腕で受ける。そして間髪入れず峰打ちを食らわした。妖魔が怯んだ隙に体制を立て直し、腕の具合を確認する。鋭い衝撃で袖

口から腕にかけてが破れてしまつたが、とりあえずは掠り傷程度で済んだようだ。

「… わて、それじゃ最後いきますか」

言ひや否や夕紀は先ほどの小刀を取り出し、振り上げて、「今すぐ君を解放してあげるからね。」

迷い無く振り下ろし、妖魔 騰の中に潜んでいた妖魔を討つた。もの

「お、夕紀早かつたじゃん。お疲れさん」

村に戻ってきた夕紀に、不意に声が掛けられた。少し視線を上げると、半袖シャツを肩まで捲り上げ黒髪短髪をタオルで搔き回している、比較的端整な顔立ちの男子が夕紀の右手にある家の窓から少し身を乗り出すような格好で笑っていた。彼は幼馴染みだ。大方、ついつきまで剣術の訓練でもしていたのだろう。

「うん。そつちもお疲れ様、暁。…シャワー浴びたらちゃんと髪乾かしなよ。風邪引くよ？」

まるで母親みたいなことを言ひ夕紀。対する暁は、「平氣だよ。…

…つくりしょいッ」

平氣と言った傍からくしゃみをしていては説得力の欠片もない。思わず爆笑しそうになつて慌てて口を紡ぐが、声が少し漏れてしまつた。

「…つたぐ、笑つてんなよな。…あ、そうだ。さつき夕紀のお父さんが夕紀に話あるとか言つてたよ。行つた方が良いんじゃね？」  
「…は？ 今日はまだ何も悪さしていないんだけど」  
夕紀の口調に僅かに刺々しさが生まれる。

「『今日は』って……いつも悪化してるのでよ。まあお前ならやりそ  
うだけど」

「……ナンダツテ?」

ジロリと暁を見上げる。暁は透かさず「悪い、失言だつた」と言つたが、目が限り無く爆笑に近い形に細まつている。絶対真面目には謝つていられない。

「おい暁、この私を舐める奴には漏れなく天罰を」「下され  
るのはお前だ、コソのバカ娘!!」

怒号と共に夕紀の脳天に拳骨げんこつが落とされた。

「痛つ……何しやがんだクソ親父おやじっ!!」

痛さの余り目尻を潤ませつつ、後方を射殺さんばかりの眼差しで睨む夕紀。しかし、その眼差しを向けられた夕紀の父も負けてはいな  
い。

「お前、『帰つたら速やかに任務完了報告をしin』と何度も言えれば解  
るんだ!このバカ娘」

「あん?ゴチャゴチャうつせえなクソ親父。私は今疲れてんの。帰  
つて早々苛つかせんな。失せろ。」

夕紀が平然とそう言い放った瞬間。夕紀の父の表情が引き攣り、額  
に血管の筋がつづらと浮かんだ。

「……あ

直感的に何かを悟つたのか、暁の口からその声が漏れた、次の瞬間。

「夕紀……いい加減にしろこのバカ娘がア〜〜!!」

夕紀の父が遂に本気でキレた。ついでに鞘に収めていた刀を取り出し、「お前のそのひねくれた根性、俺が一から叩き直してやる。覚  
悟しろ〜!!」

事もあるうに実の娘に刀を向けた。そして夕紀は「おつ、  
良いねえ〜。私も丁度特訓したかつた所だよ。」そんなことを笑顔

で言つて、父と同じく刀を抜く。夕紀も夕紀だが、夕紀の父も大人気ない気がしなくもない。まあ、これも親子の「ミュニケーション」の一つみたいだし、別に良いんだけど。

「警備人に乱闘騒ぎと思われない内に終わらせときなよ。」

まあ、二人の親子喧嘩は最早妖魔退治屋の集落地の毎日名物であり、警備人にも既に黙認されているのだけど。

込み上げる笑みを隠すように暁は後ろを向いた。直後、堪えきれず押し殺した笑い声が漏れたが、同時に刀が交差する高い音が鳴り響いたのに打ち消され、運良く喧嘩つ早い幼馴染みの耳に届くことは無かつた。

## 02 見掛け倒しのマササマ

二十分後。本日の退治屋集落の名物公開は、いつの間にか出来ていた野次馬の波を搔き分けてやつてきた母親の「二人共、今日も元気一杯ねー。」の一言と満面の笑顔によつて強制終了させられた。父とは違つて夕紀のやることに口出しは殆どせず見守つてくれる、いつもにこやかで穏和な母親だが……今は、そのにこやかさが恐怖の念を倍増させる。

「夕紀ちゃん、お父さん、終わった?」

先程の手合わせで巻き起しつた土埃じごれいが酷く付着してしまつたプロック壙を磨きあげたり、酷く汚れた服を洗濯したりとそれ後処理をしている父と夕紀に、変わらず笑顔の母親が問いかける。

『もう少しで終わります……』

「そう。やっぱ一人は頼りになるわ。」

満足げに頷く母親。何だか、この人には一生涯掛けても敵わない気がする。

「あ、夕紀ちゃん。ちょっとお願ひがあるんだけど……お父さんから聞いた?」

「へ？えと……何を？」

首を傾げてみせると母親は一瞬、父親を一瞥。父親は若干青ざめ、手を合わせて必死に許しを請い始めた。普段、夕紀には尊大な態度を取つている父親だが、最強の存在は母親のようだ。普段から薄々気付いてはいたけど。

「お願ひって何？」

問うと母親は視線を夕紀に戻し、「今度、国主宰の全部族交流会が

あるじゃない？それに際して、各部族の長が代表して今日王族の方々と謁見する事になつてゐるんだけど…お父さんもお母さんもちょっと、用事が出来ちゃつて行けないの。だから夕紀ちゃんが行つてくれないかな？」

「はあっ？何で私が？しかも王族と謁見つて。」大体、そんなものに参加したら「身分制度とかつまらない事を強要されそうじゃん。私、そういう無理。」

「どうか、そう言わずに…」母親は困ったように笑う。この謁見は交流会についての相談会でもあるから、夕紀には絶対に行って貰わなければ困る。だが彼女はかなり強情な性格。さて、どうしたものか…。考えを巡らせていた、その時。母親の脳裏に、いつも夕紀が暇さえあれば本人（？）の意思に関係無く散歩に連れ出している、クリーム色の体と淡紅色の瞳を持つコリーに似た暁の飼い犬の姿が浮かんだ。「…それに、さすがに夕紀ちゃん一人では危ないから暁くんと紅霞こうかが付いていつてくれるって…。」

本人（犬）達には聞いていないけど。多分了承してくれるだろう。といふか了承してくれなければ困つたことになる。紅霞の方は、特に。

「紅霞が！じゃあ行く！」

満面の笑顔で夕紀は即答した。

同じ頃。ここには、虹霓國の王宮廷、光架城。その最上階の、

ある一室。

「ねえ、マジで俺が公務やらなきやいけないの？はあ～めんじくせ

…。」

緋色の椅子の背もたれに身を預け、大理石の机に組んだ両足を乗せるという、王宮人に似つかわしいとはお世辞にも言えない格好をしているが顔立ちはよく整つた少年が、右手で電子端末を弄り、左手

で赤茶色の髪をわさわさと手弾ししながら不満を口にしていった。

「申し訳ありません昂哉様…ですが、王様の「」様子が芳しく御座いませんので…。」

質は良さそりだが質素な紺色のロングスカート、恐らく下働きの身と思しき女性は申し訳無さそうに瞳を伏せ頭を下げた。少年昂哉は尙も不満大有りだと言わんばかりに、微塵も繕う事なく端整な顔を歪ませる。

少しして、昂哉は不意に顔を上げ、何か言いたげに女性を見つめた。

「昂哉様…な、何か…？」

「本当に、俺がやんなきや駄目なの？何で俺なの？てか今日の公務じゅぎつて今年度の交流会についての超重要な話し合いなんでしょう？俺みたいに見た目が軽チャラくて王族っぽさの欠片もない奴が顔出したらまずくね？」

自分の言動ひとつで王族の立場が崩壊する可能性を危惧しているのか、そんなことを言い出す昂哉。単に仕事をしたくないだけに見えなくもないが、恐らくは考え過ぎだろう。

「やつぱり、どうにもならない？」

その瞳が切なげにウルウルし始める。

「えっと…昂哉様…」

女性は困ったような顔をして昂哉から視線を逸らす。女性を見つめる昂哉の瞳には、捨てられる寸前の子犬が向ける眼差しのような、猛烈に保護欲をくすぐられる何かがあった。「あ、えと…私が口出し出来ることではないので…」

言葉を紡ぐ間にも昂哉の瞳は潤いの度合どあいを増してゆく。明らかに演技なのだが、そうだと解つても心を揺さぶられずにはいられないほどの力が昂哉の瞳の奥に宿っていた。

「」、昂哉様申し訳ありませんが、『皇帝規定法』の第一 chapter 第四条項曰其の七にて、『王が何らかの支障により統治行為を遂行することができないとき、特例として王位継承第一位の権限を有する男子がそれを代行する』とあります。『つかご理解を…』

目を瞑り、必死に言葉を絞り出す女性。目を合わせてしまつたら、今度こそ確実に落とされてしまつそうだ。

「はあ～仕方無いな。解つたよ。」

溜め息をつき、伸びをする昂哉。

「……………それで何時頃から？」

「あ、14時からです。」

「14時……つてあと一時間半くらうしか無いじゃん。結構やばくな?

「ええ、やっぱいです。…ですから電子端末など弄つておひれの暇は

御座いませんよ、早急にお召し物をお改め下さーいっ

「へいへい、解つた解つた」

言葉遣いを注意しそうとした女性を柔らかな笑顔で憮殺すると、昂哉は部屋を後にした。

「うへ…ひ、似合わなすぎる…もう嫌だあー！」

夕紀は姿見に映る自分に向かつて怒鳴った。彼女は今、左胸に桜花のコサージュが付いた白いワンピース風の衣装に身を包んでいる。いわゆる正装というやつだ。普段は特にケアをしていない、背中の真ん中辺りまで伸びた線の細い黒髪も母親によつて高い位置でボリーテールにして貰い、おまけに桜色のシュシュまでも。元々細身で背が高く、目鼻立ちがはつきりしている夕紀にはよく似合っていたが本人にその自覚は皆無で、先程からずっと先述のような調子だ。

「…夕紀、人生において諦めが必要になつてくる時もある。ていうか全然変じゃないじyan。…可愛いよ。…………さて、もう少しそう行かないとやばいぞ。」

「行つてらっしゃい暁。私は行かない。絶<sup>ぜ</sup>ッ対に行かないからッ！」そう言つと夕紀はベッドにダイブし、苛々<sup>さう</sup>しているのか手足を激しくばたつかせながら「何でこんな事に」「似合わなすぎる」「正装なんてやってられるか」等々、様々な不平不満をぼやき始めた。反抗期真っ只中の子供か。

「駄目だこりゃ」

暁は苦笑すると、夕紀の浴室の扉を少し開け、廊下で待つていたロリーの頭を撫でて「夕紀はどうしても行かないっていうから俺達だけで行こうか。」

『え〜…コウキがいないとつまんない〜。』

人間の年齢で十歳にも満たなそうな、幼い男の子の声が返ってきた。紅霞は部屋に入つていい、ふて寝している夕紀に近付くと甘えるように擦り寄りながら『コウキ〜いっしょに行こう?…コウキはコウ力のこときらい〜?』

「 大好きだよ。行こう 」

十秒前までの絶対的な拒否反応は何処へやら、即刻飛び起きて満面の笑顔で紅霞に抱き付く夕紀。

「 …さて、行きますか。紅霞、悪いけどお前が送つてくれるか？ 時間無いから」

『 わかった。じゃあ、まぢ開けて？』

暁が窓を開けると紅霞は地を駆けるのと同じように宙へ飛び出し

元の状態の倍はあろうかという大きさに変わった。更に少し細身になり、風貌は犬より狼に近い。『 体長が倍になる分、細身でなければ体が重くなりすぎて動けなくなるから』 といつ主姫の発言を聞いたことがある。

『 じゅんびかんりょう。乗つていいよ 』

その言葉と同時に二人は紅霞の背に飛び乗つた。紅霞は高らかに一声咆哮すると、天上からの光を受けて白く煌めく光架城に向け、軽やかに蒼空そらを駆け抜け抜けていった。

「 皆様、ようこそおいで下さいました。本日は王の御容態

が余り芳しくない為、私、虹霓国第一王子の昂哉が代行させて頂きます。どうぞ宜しく。」

その声は光架城の社交大広間、開け放たれたままの扉の奥から響いてきていた。夕紀達を含め各部族からの代表者が横一列に並ぶ、その目の前には柔らかな微笑みと優美な立ち居振舞いで御辞儀をする美少年。その姿に、その場に居る全員が息を呑み、見入っていた。

夕紀や暁以外は。

「ふわあ～かつたる～…。早く帰りたいよ暁～。てかあの人の笑顔  
胡散臭い」

「俺も同感だよ夕紀。ああいうのって大抵、見た目は良いけど中身  
が残念なパターンなんだよな。」

王子が列の右端から順に、一人一人と挨拶を交わし始めたのを横目で見つつ言いたい放題な一人。直後、部屋の出入口に立っている護衛兵が咳払いをし、暁は「あつ」と咳いて口を押さえる。もう少しで『王族に対する不適当発言』罪でみつちりしこかれるところだった。

「全く…何やつてんだよ暁～。」

「あはは…ごめん。」

全く悪びれずに笑っている暁の脇腹に、夕紀が容赦なく軽く拳を叩き込む。それと同時に「討魔士の部族の方々ですよね。  
見た  
感じ、俺と同じ年くらいっしょ？もし敬語とか嫌なら別にタメ口でも構わないから。」

「へつ？」

思わず顔をあげると、三日月を下向きに変えたような形の瞳に、年相応の少年らしい、無邪気で悪戯いたずらっぽい光が映っていた。

昂哉は視線で出入口の方を示し、「ほら、見張りの奴らがようやく消えた。多分、来賓歓迎の宴の準備しに行つたんだろうな。って訳で皆も楽にして良いよ～。…つあ～、疲れたあ…。」

そう言うなりキツチリと着こなしていた上着のボタンを全開にし、  
臙脂色えんじいろのネクタイを外すと椅子にどっかりと深く座った。先程までの王族らしさは完全に霧散し、そこら辺に普通に居そうな少年という感じだ。

「え…と、王子？」

「ん~何?」

「なんか……人間が変わつてません?」

夕紀がいうと全員が同感だつたらしく、小さく頷いているのが視界の端に見えた。

「そりかもねえ。まあこれが俺の素だし。護衛が居ない間だけでも良いから、ちょっと王子キャラから解放させてよ? な?」

そう言いながら笑顔を全開させる。直後、夕紀と暁の背後で何かが立て続けに崩れ落ちる音がした。恐る恐る振り向いてみると

……

「うわあ……」

王子の素敵な笑顔に殺られてしまった、哀れな少女達が至福の表情で床に折り重なり倒れていた。彼女達に紅霞が近付き、鼻先や前足でつづいて『おねえちゃん達、こんなところでおひるねしてたら、力ゼ引いちゃうよ?』などと少し的外れな注意をしている。

「……王子。今年の交流会はどんな事をするんですか?」

後方に広がる光景は見なかつたことに対することを決め込んだ暁は、ちらちらと後ろを気にする夕紀を回れ右をせつつ昂哉に問う。

「ん~? まあいつも通りな感じじゃね?」

「あの……私達、今まで交流会に参加したことなくて……。」

「え、マジで」

昂哉は意外だという風に目を見開く。

「えと……行きたいなとは思つていたけど、退治屋つていう身分上、やつぱり仕事優先なので……。」

「ああ~、解る。俺も『ああ、なんか今日は思いつ切り外を駆け回りたい気分だな』とか思つても公務に時間潰される、ってのがよくあるよ。サボるうにも誰かが監視しててめっちゃキレられたり。」

「そりそりー！キレられるの物凄くウザい。」

「…なに意気投合してんだよ」

何故かメチャクチャ不機嫌そうな声で暁が呟く。その冷淡な瞳は夕紀とかなり仲良く話し込んでいた昂哉へと向けられてくる。

「……………ん、どうしたの暁？どこか痛いの？大丈夫？」

「へつ…………あ、うん……」

不意に漆黒の瞳が覗き込んできて、思わず目を逸らす。その先に、何だか楽しげにニヤつきながらこちらを見ている瞳があつた。

「…………何見てるんですか？」

「ん、別に？」『青春だね』なんて思つてないよ

「それつて思つてるつて事ですよね王子！？」

昂哉に食つて掛かる暁を見つめ、夕紀は不思議そうに首を傾げる。だがすぐに柔らかく笑つて「暁つて、色んな人とすぐに仲良くなれるよね。羨ましいなあ」

「いや、それは違うから。…ほら、夕紀は倒れてる人達を起こして。…王子。我々の部族が今年の交流会で催しを希望するものの議案書です。」

倒れてる人（主に女子）を紅霞と共に起こしている夕紀の方を頻りに見ながら、昂哉に議案書を差し出す暁。

「お、ご苦労様。…剣技の自主練習の一般公開に各自のパートナー動物との演戦…。すげえ、超楽しそう～」

「そ、そつ…？」

年相応の無邪気な笑顔を見せる昂哉。そのテンションの上がりよう、夕紀と暁の方が戸惑つてしまつ。王子キャラの時は違つ、本当に心からの笑顔だと解る。

「んじや、退治屋さんの催し物はこの一つの内ビハリかって事で

…………

「 昂哉様、来賓歓迎の宴の準備が完了致しました … つて  
昂哉様、何ですかそのお姿は！早急に御直し下さい…！」

「 げ…っ」

大広間に入ってきた、白髪混じりの見るからに神経質そうな男性を見て昂哉は眉を潜めた。

「 …だつてさ、ネクタイ息苦しいし上着も合つてないんだもん。」  
「 何を仰有りますか貴方は！御召し物は後で御直し致しますから、  
とりあえずは今は御召し下れい。」

「 …ハイハイ」

面倒臭そうに応え、昂哉は無造作に投げ捨てていた上着を羽織り、  
ネクタイを閉め直す。

それが終わると、執事の先導に従つて夕紀達は宴会の間へと向かつた。

## 04 運命の櫛（しがりみ）

村に帰ってきた夕紀は何故かふてくされていた。

自室内を右往左往したり何もない壁を睨み付けたりと、端から見ればちよつと危険な人だ。<sup>アレ</sup>

「ゆ、夕紀ちゃんどうしたの…？ 謁見で何かあつたの？」

お菓子を運んできた母親が優しげな声音で問う。夕紀はちらりと母親に視線を寄越し、やけに静かな、いや、感情を抑えた声で「… 謁見はどうでもいいんだ。その先。来賓歓迎の宴だよ」

机に何度も拳を打ち付け、引き出しを足で蹴る夕紀。そのうち机が変形しないか心配だ。

「来賓歓迎の宴？まあ…何か特別な行事があつた場合に催される食事会のこと…？それは良かつたじゃない」

「いゝや…良くないんだそれが…あンの踊り子があ～！～！」

夕紀は雄叫びをあげながら椅子を揺する。

「踊り子？」

「食事会の時に、その場の雰囲気を華やかにする為か、王族専属の踊り子が『宴の間』のステージで舞つてたんだけど…その内の一人が…っ」

唸り声を漏れると同時に蹴りの速度が加速する。

「お、落ち着いて…。その子がどうしたの？」

「やたら客席に笑顔やら、ワインクやら投げキッスやら愛の告白的な台詞やらを撒き散らしててさ…。せつかく静かな昼食が摂れると思ってたのに、そいつのお陰でうるさかったのなんのって…！」

言いながら、自分がいつも就寝時に使っている、白地に水色の水玉

模様の抱き枕を殴り付ける。

「しかも司会進行役が『全部族交流会の意義について』とか言つて、興味ない昔話を延々と話してたりしてさー。」

「……夕紀。」

「……くつ？」

不意に変わった口調に、夕紀は思わず顔を上げた。合わせた母親の視線にはいつも通りの穏やかさと、真剣さが在る。

「その昔話…少しでも覚えていろ?」

「へつ? …いや…特には」

「それでは駄目よ。」

母親の眼差しはひたすら真剣で。いつものように笑つて流したり出来るものでは無かった。

「今から話してあげるから。じつかり聞きなさいね」  
その言葉に夕紀は自然と頷いていた。

「……『虹霓』と私達の国、『黒翳』<sup>じくい</sup>は古の時、両方の国家を巻き込んだ歴史的戦乱を繰り広げた。」

古文書と思しき数々の書物や巻物が所狭しと収められた、薄暗い部屋の中でそう言つたのは、夜の闇をそのまま閉じ込めたような大きな瞳を持つ少女だ。

「結構、互角な戦いだったんだ。…だけどね、」

古文書の一冊を手に取ると迷いなど一切無い手付きで捲つてゆく。  
そして、あるページを見付けると同時に手を止め、「　虹霓に  
はその戦乱を止める為の、ある『秘宝』があつたんだ。」

少女は顔を上げ、次の言葉を待つ従者達を見回す。その虚ろな瞳を、少女の瞳に潜む闇が飲み込み、黒に染めてゆく。

「ねえ、皆」

笑いかける瞳が、鋭く光る。そして、言った。

「もうすぐ、虹霓で催しがあるのは知ってるよね? 時間は満ちた。今こそ、私達の歴史をやり直す時だ。… わあ、始めましょうか」

少女は窓の外へと目を移す。西の空の端は、全てを焼き尽くす鮮烈な業火の色。東の空はその業火ごと飲まんとするかのように、薄暗い闇が迫ってきていた。

「……でね、戦いは虹霓がその秘宝を使つたことで一応休戦という形になつたんだけど…。以来、黒翳の人達はずっと私達を憎んでいて、隙を突いていつか私達に再襲を仕掛けようと目論んでいる。そろそろ危ない時期なの。」

「どうして?」

「その時に秘宝に施された封印が、永い時間が経つたことでそろそろ自発的に破られてもおかしくない時期なの。だから今度の交流会では絶対に封印の更新をしなくてはならない。その為に、私達国民の目に触れる場に秘宝を晒す事になる。 黒翳が秘宝を強奪するにはこれ以上無いほど都合の良い瞬間よ。だけど強奪されてしまう。絶対に。秘宝に関する書物の中に『この宝、陽の処へ導かれるは不变静穏。陰の処へ誘われるは世情荒廃』という言葉があるんだけど…聞いたことくらいはあるわよね?」

「うん…。」

夕紀は静かに頷く。いつだつたか、父親が『虹霓の民の心を一つにするには欠かせない言葉だ』とか言つていたのを聞いたことがある。あまり深い意味までは解らなかつたけど…。

「あ、もうこんな時間。暁くんの家で剣技特訓があるんでしょ? 行かなくて良いの?」

「あ、そうだ忘れてた! 行つてきますーー!」

壁に立て掛けっていた、愛用の紅の刀を掴むと夕紀は慌ただしく隣家へと駆け込んでいった。

遠ざかってゆく足音を聞きながら、母親の口元の笑みは搔き消えてゆく。

何故、今なのだろう。何故、娘達なのだろう。抗う術はないと知りながらも、やるせなさは拭い切れない。卓越した剣技や妖魔退治の腕も、来たるべき瞬間の為に用意されたものであるとするならば。抱く想いは賞賛ではなく、絶望が襲つてくるばかりだ。

目の奥が熱くなつてきて、綱戸を締めた窓辺に足早に駆け寄り空を仰いだ。

天上には幾つもの星々が淡く瞬き、剣が交差する高い音が夜風と共に鼓膜をくすぐる。

…こんな、安穏な毎日が続けば良いのだけど。何かが動き出そうとしているのが何となく解つてしまつ。

それは、夕紀が『選ばれた』からだ。彼女が生まれてきた時から定

められていた、運命といつかの檻しがらみ

「なんで、夕紀が……。」

誰ともなく発せられたその問いかに応えうる者は居なかつた。

2週間後。遠くに見える森林の彩りが移りつゝと張り合っているかのような早さで、交流会の準備は着実に進められていた。

本日、夕紀達は演戦の備品類 刀の元となる鉱石や砥石、演戦時の万一本の負傷に備えた治癒薬などを、隣村の調薬師の村へ買い出しへ来ている所だ。

「え~と…紅石が20、碧石15、緑石20、そして療薬が50……つて、多すぎだー！嫌がらせかよ、あんのクソ親父い！！！」

「ゆ、夕紀落ち着いて…田立ひぢゅうよ…。」

「知るかそんなモン…！」

買い出し班として一緒に来た女子達が宥めるが、夕紀は治まらない。気に入らないものは気に入らないんだ。

「夕紀、落ち着けよ…。後でこの村のお菓子でも奢つてやるから。」  
買い物出しは基本的に女子の役目なのだが、「男子の方の仕事（試合場建設など）は余裕があるから多少遊んでいても大丈夫」ということで何故かつてきた暁が苦笑混じりに言つ。まあ、心配なのだろ。夕紀に買い物出しに来られた店の今後が。

「本当に…一言は無しからねー！わあい」

一気に機嫌を直した夕紀は、買い物の有無を確認するとレジに向かつた。

レジには小柄だが恐らく夕紀と同じくらいの年頃だろう、焦げ茶色の髪を一つに束ねた少女が、癒し系垂れ流しの微笑みを湛えながら

手元のメモ用紙に向やら落書きをして遊んでいた。

「あの～…良いですか？」

「あ、すみません～。」

予想通りのんびりした声で応え、ゆっくりした動作で会計を始める。その間、夕紀は何気無く少女の手元のメモ用紙に目を落とした。そこには鉛筆書きでも十分にそれと解る、紅葉まんじゅうや団子等のデッサン。お腹が空いているのだろうか…

「え～と… そうだなあ… 交流会準備期間だし、特別に49720ウイングで良いですよ。」

店番をしていた女の子が穏やかな笑顔でそう言い、夕紀は我に返つた。

「え、嘘。…なんか安くして貰いすぎてる気が…」財布を取り出しそうとしている格好のまま固まる夕紀。因みに、1000ウイングは現代の100円くらいだ。つまり、夕紀達は大雑把に考えて5000円くらいの買い物をしたことになる。サービスして貰つたことを考慮したとしても、鉱石やら医薬品を買えるだけ買い込んで約5000円とは、本当に安い。またもに買つたら現代通貨価値で3万円を下らない、といひくらいの大量買いつの。

「良いの良いの。あんまり高額の買い物されたら計算するのも面倒だしねえ～。」

「…ん？」

今、物凄く本音っぽい台詞が聞こえたよ…。

「では50000ウイングからお預かり致します～。」

「…あ、うん…。」

…まあ空耳とこ～とこしてたもん…。きっと、氣のせいだ。うん、あつひと。

「では280ウイングの御返しで…あ、そうだあ。」

女の子はレジの内側から何やら大きな箱を引っ張り出し、「お店に来てくれたお礼に、この中から好きなのを一つあげますよ。何が良いですか~?」

そう言いながら箱を開け、夕紀の方に寄せる。箱の中には、橢円形の紅玉が嵌め込まれた指輪や四つのハート形にくり貫かれた淡い薄紅の石が合わさりクローバーを象つていてデザインのネックレス、透明な石の中に朱色の石の欠片が紛れていて光が当たると石の中で炎が燃えているように見えるブレスレットなどが納められていた。

「ん~…じゃあブレスレット下さい」

「はいはいまいど~。これ綺麗ですよねえ…よし、オッケー。」

「あ、有難う…『じぞいます。綺麗…。』」

ブレスレットを撫でると店内の灯りが反射して淡く光った。

「大切に扱ってくれなくても良いけど気に入ってくれたら嬉しいな~。」

そんな、自虐的なことを言う少女に夕紀は笑つて「いやいや…大切にしますよ。…あなた、名前は?」「彩葉<sup>いろは</sup>って言います。宜しくです~。」

相変わらずのユルい口調で言つて、お辞儀する彩葉。

「えつと…そんな、恭しくしなくても良いで…良いよつ。普通の話し方で。…宜しく、彩葉ちゃん。」

「…い、彩葉、そろそろ店番代わるよ?」

声と共に店の奥から少年が出てきた。

その背丈は現在約155センチメートルの夕紀より少し高いくらいなので、160センチメートル位だろうか?随分と猫背で、本当の所は解らないけど。

「…こ、こらっしゃいませ…。あ、あの…な何か?」

無意識にジロジロ見ていた夕紀の瞳から逃れようとするのに、少年は身をすくませ固い笑みを作る。長く伸ばされた前髪で良くな見えないが、恐らく困惑しているだらう瞳で見つめ返してきた。

「君は相変わらず人見知り激しいねえ雷斗。」お方は夕紀ちゃんだよ。」

「いや、そんな丁重に扱われるような身分じゃないです……。まあ、宜しく。」

夕紀が何気無く差し出した手にも少年 雷斗はびくと肩を震わせ、恐る恐るといった体でその手を見つめる。結構な対人恐怖症なようだ。

「……あ、ごめんなさい。……そ、そんなにビクビクしないで」

もう、やけくそだ。思いきって雷斗の黒髪をクシャクシャと搔き回す。目を完全に覆い隠していた前髪が無造作に搔き分けられた刹那。

「……」

息を呑むのも無理はない。怯え混じりに逃げ惑う瞳は周りの人間とは違つ、澄んだエメラルドグリーンだったのだ。

だが、それも一瞬のこと。雷斗は直ぐ様きつく目を閉じた。それに対して夕紀は

「……綺麗……」

無意識に出た言葉。嘘偽りは一切無い、本音だ。こんなに綺麗な瞳は見たことがない。

「え……」

きつく閉じていた瞳を、雷斗は大きく見開いた。

『綺麗』なんて、今まで誰からも…。今自分の隣に立っている、穏やかな微笑を湛える少女以外には誰からも言われたことがなかつた。

「……。」

雷斗は口を開き、俯いた。

「あ…えと…『じめん?』」

「ジロジロ見て悪かった、綺麗な瞳だったから…つい、な…悪かつたよ。」

雷斗の前髪を元に戻してやりながら暁がすまなそりに囁く。

だけど、やはり綺麗だと思つ。周りと違ひとかそんなのは関係なく。純粋に。

「私、瞳は真っ黒だからさ。君が羨ましいよ。そんな綺麗な色してて。」

「私も好きだよ~。前髪、何だか邪魔だな~。くくってやる~。」

「わ、ちょ彩葉…。」

慌ててガードしようとするが時既に遅し。実に鮮やかな手さばき（？）で雷斗の前髪は一つに纏められてしまった。

「うわ~…。」

今度こそ、本当に顔を上げられないとばかりに雷斗はレジに顔を押し付けた。それを良いことに彩葉は自身が彼の頭髪に施した細工を引っ張つたり軽く叩いてみたりして遊んでいる。結構ひどい気が…。

「そんな、瞳の色なんて気にしないで。雷斗は雷斗でしょ。」

「きみ　きみ

「やうだよ。普通に目が黒い俺としては羨ましいと思つよ~・超綺麗じゃん。」

夕紀と暁はこれでもかと褒めちぎつてみるが、雷斗は顔を上げなかつた。だが、二人は全く気にせず、続けて言つた。

「ねえ、雷斗って呼び捨てで呼んで良い?」

「まあ拒否られても呼ぶけどな。」

そんな、勝手な…。そうは思つたが、喉元までせり上がりってきたその言葉が口に出る事はなかつた。そんなことより、なによりも……。

「…うん。」

嬉しかつた。

思わず口元が緩む。

彩葉以外で、初めての……友達だ。

「…………って、やべつーもう少しで集合時間だ。お前のお父さんがキレる前に帰るぞ夕紀!」

「あ、うんっ!じゃあまたね二人ともっ…って天氣悪くなつてきた…。最悪~帰るまで降るなよ~…。」

「うん、またね~。」

「あ、ありがとう!」やれこましたっ

穏やかな笑顔で手を振る彩葉と雷斗。しかし、その声に応える間もなく夕紀と暁、その他の女子は村に向けて全力疾走していく。

更に空高く、遠い場所。  
トトロ

黒みを増す雲に紛れ、薄暗い色をした龍が低く鳴いた。瞬きのたび、  
雷光の如く瞳が光る。

「…………『歴史』は、繰り返すものだ。…………また、一緒に遊び  
う……楽しみにしてるよ……。」

すっかり季節が移ろつた、とある朝。

「…今日か。」

廊下の窓の一つを開け、朝焼けの光を淡く滲ませる薄曇りの空を仰いで昂哉は呟いた。網膜に淡く訴えかけてくる光を瞼越しに感じる。暖かい。

瞼を上げ、視線を前に戻す。庭先に咲き群れる秋桜が真っ先に目にに入った。幾分か涼しくなった風に揺れる、優しい桃色に目を細める。

「ハナ 昂哉」。

「わ…っ！」

突如、鳴った声。驚いて身を固くすると同時に、フローラル系の香りを身に纏った少女が抱き付いてきた。一瞬前のめりになるが何とか堪える。

「…百合花。ゆりか おはよう。」

さりげなく体を捩りながら対人用の爽やかな笑顔で挨拶する昂哉。本心としては「気安く触るな」とか言ってやりたいが、この少女

百合花にそんなことをしたら色々と面倒なことになる事を昂哉は知っていた。

「あ～ん、コウ何で逃げるのよ～。」

頭の高い位置で部分的に二つに結わえた、少し赤みがつた茶髪を揺らしながら頬を膨らませる百合花。少しつり目がちな、アイメイクの影響もあってやや目力の強い上目使いが昂哉を捕らえる。

「ベタベタされるのは嫌いなんだよ。」

「昂哉つたら…百合花が可愛いからって照れちゃって」

「違う…はあ…ただでさえ今日は気が重いんだからさ。疲れさせないでくれよ…。」

「…………うん…ごめん。」

「ほへつ？」

意外にも素直な反応に、昂哉の方が氣の抜けた声を出してしまった。

「…ねえ」

先程とは打って変わって、静かな声を紡ぐ百合花。

「ん?」

「昂哉…。大丈夫、なんだよね…？」

「何をいきなり…。」

反論しようとした言葉を飲み込む。百合花の表情には痛切に、懸命に何かを想っているのがハツキリと現れていた。

「百合花は昂哉が嫌な目に遭うなんて、嫌だよ…。」

「…そんな心配しなくても大丈夫だつて。」

「嫌なの…つ…！」

百合花の瞳が揺れる。まっすぐに見つめてくる瞳。…そんなの、逸らすより他に無い。

「…大丈夫だつて。まだ交流会で『何かある』つて決まっている訳じゃないんだから…。」

それは、『何もない』と決まってる訳じやないのと同義だけど。願うしかない。

本当は、何もない訳がないと解つてはいるけれど。

「…とりあえず、天気が崩れない内にやらないとな

奥の方にうつすらと見える山の陰影。それを取り巻く、やや薄暗い色をした雲を見つめながら昂哉は呟いた。

「暁～。は、や、くッ！」十分に昇りきつた日の光が照らす、緩やかな坂道を夕紀と暁は駆け抜けっていた。

「ああ解った、解ったけどお前、速すぎ……。あと、テンション高すぎだよ」

「暁が遅いんでしょう？早くしないと置いてっちゃうよ～。せっかくの交流会なんだから気が逸るのも仕方ないじゃん？」

そう言つて小首をかしげてみせる夕紀。すかさず暁は視線を逸らし、「…そ、そう。なんか夕紀、幼い子供みたぐはあツ」

不自然に紡がれた語尾は恐らく、彼の腹に寸分誤らず真っ直ぐ突き刺さった圧力によるものだらつ。

「…誰が幼子みたいだつて？おじコリ」

女らしさの欠片もない言葉遣いで、足元に沈んでいる暁を爪先で小突き睨み付ける夕紀。警備人が通り掛かつたら間違いなく暴力沙汰だと判断されかねないだろうが、夕紀の脳内あたまにはその可能性を思慮するという思考回路はこれっぽっちも存在していない。

「…」めんなれー

「よひしー。」

低く呟くと夕紀はやけにあつさりと身を引いた。暁は上体を起こし、意外そうに夕紀を見つめて「夕紀が素直なの久し振りだ。そういう今日あんまり天気良くないし。どうしよう、俺…、今日傘持ってきてない…。」

「確かに天気良くないけど、失礼にも程があるわ～！…」

「お…落ち着くんだ夕紀。話せば…」「解ろうなんてこれっぽっち

も思つてないから てか朝から駄け足でひみつと疲れたでしょ暁君。

「ちよつと永眠つて良いよ」

「ちよ、待つて話を聞… もやああ

……」

断末魔の絶叫が、紅と黄とのグラデーションが田にも鮮やかな山々に木靈した。

隣村との境目にある広場に向かつて、中央部に聳える大木の傍には既に人影があつた。

「あ、夕紀ちゃん。こいつですよ～。」

柔らかく間延びした声が自分を呼ぶのを聞くと、夕紀は顔を上げ、フレンドリーな笑顔で手を振り返して

「おはよ～、彩葉ちゃん。……あれ？ 雷斗は？」

「居るよ。ってことで出てきましょ～ね～雷斗クン」

「わ～、ちよ、彩葉引つ張らないで…」

口では僅かな抵抗を試みつつ、大人しく木陰から引きずり出される

雷斗。

「彩葉ちゃんつてたまに強引だよね… おはよう、雷斗」

「お、おはよ～」… じゃなかつた、お… おはよ～」

出合つてから既に一週間経つていて、その声音は相変わらず“ちよ”じゃない。もつと普通に話してくれても良いのに。そういう意味合いを込めて、出合つた時同様に雷斗の髪をわしゃわしゃと搔き回す。

「な、何… つ？」

「髪、ふわふわしてて触り心地良いね～。気に入った。」

柔らかく微笑むと、雷斗は困惑と照れが半々といつた感じの小さい

笑みを浮かべた。

その時、広場の一角に設けられた音響装置から、鍵盤楽器を奏でているかのような、優しい音楽が流れてきた。夕紀の大分曖昧な記憶では確か、音楽は開会一時間半前と一時間前、そして三十分前に開会式場所の富廷より放送がかけられることになっていた筈だ。時計台を見上げると、今はちょうど九時半。開会式は十一時からだから……今の音楽は一時間半前を知らせるものか。

「ちょっと早いけど、行くか。」

「暁……今行つてもちょっと……ていうかめちゃめちゃ早すぎるんだじやない？」

早く着き過ぎた結果、富廷の門が開くまで秋風に晒されながら門の前で突つ立つてただひたすら待つ……なんてことをしたくない夕紀は、心の底から心配そうに言つ。

「心配するな。紅霞に空中散歩しつつ向かうよ」と言つよ。滅多に見られない、虹霓国<sup>ヒルゲコウノ</sup>の全貌を見下ろせるし——石一鳥だろ?」

「嘘、やってくれるの!？樂しみ……だけどさうの親父にバレたら殺されるね(笑)」

「……まあ、夕紀のお父さんなりに心配してくれてんだよ。仕方ないからその時は一緒に怒られてやる。……そんじや、紅霞」

『うんつ』

暁のリュックから飛び出ると、紅霞はいつかの様な狼のような姿になつた。そして四人がその背に身を預けると同時に跳躍、向こうに薄く霞む富廷へと駆け出した。

次第に色を濃くしてゆく雲で次第にぼやけてはいるものの、眼

下の景色は言葉を封じるには充分だった。

夕紀や暁が住む、後方に高低の激しい山脈、東側に野生動物の住まう森林、西側に天然の洞窟を利用・改造した大規模な訓練場がある退治屋（討魔士）集落。

雷斗や彩葉が住む、周りに速効効能のある薬草やリラクゼーション効果のある芳香を漂わす花が自生する、だだつ広い野原に囲まれた喉かな調薬師集落。

その調薬師集落の最東端に掛かっている橋を渡つた先には、虹霓国の中でも唯一、二部族が共存している魔術師と龍使いの集落。周りを海に通じる清流に囲まれ、中央部にサファイアのような深く澄んだ色をした、龍が住まうと言われる湖がある。

ちなみに討魔士の村の森林を抜けた先にも、動物全般と心通わせる事が出来るという万獸使いの集落がある。討魔士集落と共に存はしていないが。

そして、それら集落の中心、虹霓国の中核部に君臨するのが虹霓国を統べる王族の宫廷だ。

その宫廷の庭に咲く、季節を考えれば恐らく秋桜だろうピンクやオレンジ色の花が点々と見えてきた。

「…やっぱり空中散歩するにも早過ぎたんじゃない」「いや大丈夫だ。…多分」

「ま…まあ二人共。王宮の裏手に、国民に自由解放してゐる公園あるから其処でお茶休憩でもしていよう?」

「こんなこともあろうかとお菓子持つてきただよ~。調薬師集落名物、疲労回復効果のある大福です。」

「彩葉ちゃんナイス。いつただきて。」

一人一人に手渡そうとしていた大福を霞め取り、満面の笑顔で頬張る夕紀。さすがに傲慢なのでは…と暁の視線がたしなめるが、微塵も気にしていない。

妙に早いスピードで空を流れる雲も、今までより一際冷涼な風が横切つたのも、刹那、何か黒い影が後方を飛び去つたのも。夢中で大福を咀嚼する夕紀に、察することは出来なかつた。

その後裏手の公園に降り立つた四人と一緒に大福を食べ尽くし、綺麗に整備され鮮やかな色を開く花壇の花を愛で、心弾む想いで開会式を待ちわびていた。

悠久の歴史の循環<sup>サイクル</sup>が巡り来る足音にも気付かずには。

狂った歯車は、止まらない。

「……人混み、ギモチワルイ。暁……私帰る。」

大人子供が入り乱れた、妙な息苦しさと暑さが充満する人混みの中で夕紀は呟いた。

「いや、ダメだから。てかお前、交流会楽しみにしてたじやん。さつきまでの余裕はどこに行つた？」

その隣でやれやれと溜め息をつく暁。そして彩葉、雷斗の順に並んでいる。

お茶休憩を終えた4人が宮廷に行つてみると丁度開門直後であり、秋氣冷涼な風に晒されることもほとんど無く宮内に入ることが出来た。

今、4人を含めた國民達は宮廷内の第一庭園に移動し、二階部から王族の面々が姿を現すのを待っている所だ。庭園とガラス戸一枚で隔てられ、緋色のカーテンが引かれている向こうで時折影が行き来するが、準備にはまだ時間が掛かるらしい。

「…王族か何だかよく解らないけど時間掛かりすぎ。チャツチャとやれよ。」

「無茶言つなよ夕紀。催し物には万全な準備が付き物だろ。」

次の瞬間、夕紀は「あん?」などと非常に品位に欠ける効果音と共に睨みを利かした。だが、それより早く暁が視線を戻し、視線が合つことはなかつた。

「…ちつ。」

いつもは私と同じくいろいろなこくせこ、何でこいつこいつ時は澄ました顔してやがるんだ。むかつく。

思わず地団駄を踏みそうになつて、前列からの諫めるような咳払いに気付く。そうだ、人前だつた。いけないいけない。

ため息をひとつ溢して視線を前に戻す。と、ようやく一階部の扉が開き王族の面々が次々に出てきた。それだけで辺りの雰囲気は柔らかく、明るく、そして厳かなものへと変わつた。

そんな、『雅』という言葉を体現したかのような面々が一人ずつ一礼をし、優雅に玉座に腰掛けてゆく。

少しして、進行役のかただ一人立つ昂哉が柔らかい微笑を穿いて式辞を述べる。次いで、夕紀には既に無用の長物以外の何物でもない、かつて父にも母にもぐどいほど聞かされた、交流会の意義と交それ流会に関する古の争乱の話を始める。

ああ、はいはい。その話はもう良いよ。何べんも聞いてます。え、と昔、平和だつた虹霓に隣の国からウザイ奴らが邪魔しに来て。国内が滅茶苦茶荒れて。それが何年も続いたから埒があかない、強行手段だつてつて話になつて。……で、……どうしたんだつけ？

夕紀が脳内で自問自答しながら視線を戻すのとほぼ同時に、昂哉が傍らの低い机から何かを持ち上げた。

それは幾つか宝石がついた、宝冠だった。ますます黒みを増す雲の切れ間から僅かに射す光が当たると、まるで宝冠全体を光が包み込んでいるように淡く輝く。

「こちらの宝冠に施された封印は永い時間を経て、徐々に薄れつつあります。ですから只今より封印の更新を致したいと思います。皆様、身辺の安全確保を充分にお願いします。」

数刻前まで昂哉の顔に宿っていた柔和な笑みが完全に身を潜めた。

それに合図されたようにある者は最大限のチカラで結界<sup>シールド</sup>を張り、あらわす者は己や周囲の人々の身に衝撃無効・減速術を施し、それらのチカラが充分でない子供や年配の人々などは数人の宮廷役人と共に出来るだけ奥へと足早に移動する。

全員が各自の最大限の護身策をとつたのを確認すると昂哉は、袖の方に立っていた、純白のワンピースを身に纏い赤茶の髪を部分的にツインテールにした端麗な少女から白銀の小刀を受け取った。

一度、それを机上に置いて深呼吸をする。端整な面立ちが引き締まる。その眼光は、万物を一瞥しただけで斬り捨てられそうなほど鋭い。だが、彼の身を包む雰囲気は意外なほど静かで、穏やかなままだ。

「……では、解術を」「させないよ。」

怪訝そうに昂哉は視線を四方に投じる。　　その時だ。

これまで以上に暗雲が立ち込め、淡く射していた光を遮断した。　　それも、富廷の上空だけに。

「え、何？なんか暗いよ」

どよめく人々の中で夕紀だけが、そんな呑氣なことを抜かす。

「お前、普通は慌てる所だからー何で落ち着けるんだよー！」

暁がそう言おうとした瞬間

唸るような雷鳴が鳴り響き、刹

那、強い光が天を引き裂いた。

「 何てことを！」

静寂の後、再び時間を動かしたのは女王の声だった。その表情は青ざめ、紅色の口元が痙攣し、時折白い歯がガチガチと音を鳴らす。

その震える視線の先に、所々がひしゃげ、宝石が欠けたり取れたりしている、無惨な宝冠の残骸を映しながら。

「弓手隊は速やかに応戦形体を取れ！！」

数刻前とは似つかない昂哉の声と弓手隊が超人的な脚力で地を蹴り飛び上がるのだが、徐々に降りだしてきた雨の中に響いた。

結局、今年度の交流会は急遽中止となつた。あのような緊急事態があつたのだ。誰一人として異論は許されない。

襲ってきた敵方 隣国、黒鷲の連中は『手隊が追いはしたが、過干渉不可領域に入られてしまい制裁するまでには至らなかつたらしい。つい先程まで交流会の合間に出される筈だつた昼食が大量に盛り付けられていた、宴会用の長机に両拳を叩き付け、ギリ、と悔しげに奥歯を噛む夕紀の頭に、そつと暁の手が触れた。

「…何？」

多少刺々しさが残る表情で振り向くと暁は、

「交流会が潰されたのは残念だけど、夕紀が…他の人も。誰も怪我しなかつただけでも良かつたと思つよ。」

「でも…演戦やりたかったのに。ああもう、黒鷲<sup>あいつ</sup>らさえ来なければ…っ！」

懸命に抑えてはいるが、その声音には行き場のない烈火の如き怒りが滲み出ている。

暁は小さくため息を付き、周りを多少気にするような素振りを見せた後「ちょっと、廊下に出よう。」

夕紀の返答を聞くより先にその手を引き、口々に不安に揺れる心境を述べ合つ人々の波を搔き分けて出入り口へと向かった。

「な、何だよ暁？ていうかちよつと手H痛い…。」

「あ、ごめん。」

暁はすまなそうに微笑を浮かべたがすぐに口をつぐみ、その表情は

真剣なものになっていた。無言のまま、夕紀の背後にある小窓から外を眺める。なんだか見つめられてるようと思えて、夕紀は恥ずかしくなった。昔から人の視線は苦手なのだ。

「で、廊下に出たは良いけど…何か？」

「……。」

「……暁？」

名を呼べば視線は向くので無視されてはいけないのは解るが、暁は何も言わない。いや、言つのを躊躇つていいのかも。言葉を発さずとも、幾度となく空氣を食するように口をパクパクと動かしている。

「……じれつたいな、さつさと言わんかいッ」

暁の脇腹に軽く正拳突きを叩き込む。何するんだ、と言わんばかりに瞳を歪める暁。

「田で何か言つたとしても、私には伝わんないよ。口で言わなきゃ。ほら、何か言いたいことあるんでしょ？ 言つて……」

「俺、黒翳に仕返し行くわ。」

あれだけ強情に黙りを決め込んでいたのが嘘のようだ、心なしか吹き切れたようにさえ見える滑らかな口調で言つ。

「え、いや…それはちょっとヤバいんじゃ…。」

「あいつらは夕紀の楽しみにしてた交流会を潰した。だから俺はその借りを返してくる。」

暁の、その真っ直ぐな眼光は他者に有無を言わせない、鋭く研ぎ澄ませた強さを湛えていた。

「…駄目だよ暁。だつて、また『あんな』ことになつたら…」

…

その時だ。夕紀の声と重なるように、宫廷役人の一人が顔面蒼白で駆けてきて、震える声で叫んだ。

「大変です！…宝冠の封印に、欠陥が…！」

「一か八かだつたけど、結構上手く行くモンだね。アハハつ」  
闇色の少女は黒い小さな珠　　宝冠についていた宝石の一部であつたそれを右手の親指と人差し指で摘み上げ、愛でているようにも睨んでいるようにも見える瞳で見つめながら言つ。

「…でも宝冠」と奪取までは行かなかつたな。残念。満夜の力を以てしても駄目か…。」

「ああもうウルサイなあつ。それは言わない約束でしょ…？酷いよ

冬司

少女は、満夜はまるで実齡より遙かに幼い少女のようにプーッと効果音を添えながら頬を膨らませる。

「「めん」「めん…」コレ使ってお前に役立つモノ作つてやるから機嫌直せよ。つてことでコレ、ちょっと借りるな？」

冬司は苦笑混じりに笑いながら手を伸ばし、満夜の手から珠を受け取つた。

「何に使うの？ていうか無闇に悪用しないでよね？」

「しないよ。」

即答し満夜に柔らかい微笑を返した、その刹那。冬司の瞳の奥の色が変わつた。

「冬司？」

「満夜、お客人がいらしたようだ。もてなして差し上げようか…。  
薄いカーテン越しに伝わる白い光を、黒に陰る小さな珠で透かして  
見るような仕草をする冬司。

珠の色で、眼前の世界は暗雲が掛かつたかのように半透明に空ひり。ふと視線を向けるとその奥の方に、真剣そのものの表情をした少年と少女が、背丈に不釣り合いな太刀たちや矛ぼこを携えてこちらへと歩を進めているのが見えた。

「ねえ暁？ やつぱり子供一人じゃ危ない…。…戻ろ？」

「ここまで来てそれは無いだろ。」

心配そうに見上げてくる瞳を暁はバツサリと断ち切る。二人はある後、周囲の目を盗んで宮中の裏手の広場へ向かつた。そして、中等魔導学院でいつか習つた幾つかのうろ覚えな移動魔法を適当に唱えている内に術が作動したらしい、突如巻き起こつた竜巻に飲み込まれ、飛ばされて、気付くと虹霓と黒翳の国境くにゆきである草原の中に大の字で寝転がっていたというわけだ。

当たり前だがここに居るのは夕紀と暁の子供一人だけで、おまけに手に持つのは日々の自主練習で刃は毀れしまくりの、無駄に長くて重い太刀や矛。素晴らしい扱いにくらい。もし残忍な敵に見付かつた場合、文字そのままの意味で瞬殺され兼ねない。しかもまずい事に周りは草。下手に動けば音でバレてしまうだろう。とりあえず、風が凪いだらその音に紛れて誰もいない内にこの草の海から抜け出そう。暁は脳内で考えを論理的にまとめて、それを幼馴染みに告げようと振り向いた、が。

「……。」

今の今まで彼の後ろに居た筈の少女が居ない。縁が波打つのみだ。暁の背中に冷や汗が伝づ。まさか夕紀……「おい夕紀つ返答がない。見つかるのを覚悟でもう一度声を張りつとした、「

ふえ？あ、呼んだ？」

彼の立ち位置から約三メートル。頭から背中、更には尻の部分まで土埃や枯葉を付着させた、とても年頃の少女とは思えない風貌の人影が真昼の光を纏つて起き上がつた。「…やつぱりな…今は『草、良い匂い』ふかふか~』とか言つてる場合じやないんだからな！ほら、起きろっ！」

「え~でも…」

「言い訳無用つ…ほら

半ば強引に夕紀を立たせ、矛を渡す。すると、あれだけ不平不満を愚痴つていたのがぴたりと止んだ。顔を覗き込むと退治屋、いや討魔士に似つかわしい、引き締まつたものへと変わつている。

「…夕紀も仕事デキる方だつたんだよな、いまいち信じられないけど。」

「あん？暁、私にそんな愚痴なことを言つて良いこと思つてる？よし、そんなに言つなら証明しようぢやないか。暁で。」

「ちよ、止めろい」

満面の笑顔で矛を構える夕紀から必死に逃げる暁。敵よりも遙かに恐ろしいことを平氣でやらかす幼馴染が居ることを、すっかり忘れていた。

「…ま、無茶苦茶なところも嫌いじゃないけど。」

逃げながら呟き、挑発する為であるうつ笑顔で振り向く。少女は予測通り額に血管の筋を浮かべ、猛虎のような迫力で追い掛けてくる。

そうしてはいけないだろうが、思わず吹き出してしまった。

「うあ〜き〜ら〜。」

「おおつと、怖いなあ

」

笑いながら後ろに流していた視線を前に戻す。  
レを『矢が掠めた。

その頬スレス

「虹霓の方々とお見受け致しますね。……我が國に何か用かな?」

好感など、とても持てそうにない笑みを称えた、数人の黒髪の兵達  
が一人を取り囲んでいた。

決して取り乱さず、一人は周囲の状況を確認する。黒靄あいての兵は六人。さつき射掛けてきた弓手が四人と、細身の氣彈砲きだんぱうを抱えているのが二人だ。

「……つたぐ。暁に付いてきたばかりに超～～～ッ面倒なことになつた。」

「そんな、『超』を強調すんなよ！さすがに傷付くわ！！」

「本当の事じやん。……つてことで逃げるッ」

その声を捨て置き、夕紀は人類が出し得る脚力限界速度を明らかに超越しているだろうスピードで駆け出した。一度、哺乳類最速の速さを誇る、アフリカに生息するあの猫科の動物と張り合わせてみたい。

暁はそんなことをふと考へた刹那、すぐに我に返つて「待てよ夕紀！。いくらあの軍兵さん達が、自分らの実力不足を物騒な道具を持つことで誤魔化そうとしている様が痛々しいからって。すぐにトンズラすんのは失礼だぞ。」

そう言うと暁も夕紀の背を追つて駆け出した。もしもこの場に第三者が居たならば、遠くなつてゆく少年の背中に向かつて告げただろう。

「失礼なのはどっちだ！！」

パン！といかにもそれらしい音が響いた。そして、旋風の如く渦巻く『氣』が放たれた。『氣』は草原の土を掘り起こし、雑草を巻き上げながら寸分たりとも違わずに暁の背に接近してゆく。しかし暁は、夕紀の隣に追い付き、急く必要が無くなつた為か、呑気に口笛など奏でながら悠々と歩いている。もしも、あのまま『氣』が衝

突など「 する訳無えだろ? 」

暁が振り向いて口端くわはを吊り上げた瞬間、唸り声をあげて彼に向かつていた『氣』は不可視のチカラに気圧されたように後退を始めた。

「くつ…」

まさか、まだ十一、三歳と見える子供がここまで実力チカラを持つていたとは、予期していなかつたのだらう。軍兵達の瞳は焦りの色で塗り潰される。

「…つて、こんな雑魚雜魚い奴らの相手してゐる場合わじやない。お~い夕紀、置いてくなよ~。」

呑氣な声が秋風と共に緑の波の上を滑る。

「…ふざけやがつて…ツ」

先程、氣弾砲をブツ放した軍兵の一人が低く呻いた。彼の内の感情に影響されてか、『氣』が一層、勢いを増した。軍兵は嫌悪感を覚える笑みを口元に浮かべる。 もつとも、『氣』の後退は治まつてなどおらず、軍兵自身に向かつているままだつたが、それに気付く事もなく……

「 寝てる。」

先程、からかうような明るい声を出した人物とは同一とは思えぬ、低く抑げきえた声音。それが引き金だつたと告げるよう、氣付かぬ内に撃及ききゅうし確実領域に達していた『氣』が眩い閃光を放つた。

「あはは~敵兵あいつら、目め回してゐ。さすがは暁。家が武術全般対応の道場なだけあるね。」

「まあな。そんじゃ、行こうか。雑魚共に構つてゐ暇はないしな。」「え~? まだ遊びたい。」

軽く頬を膨らませる夕紀の背を軽く叩いて氣を落ち着かせ、両肩に

手を添えて回れ右をさせる。補足だが夕紀のいう遊びとは、いわゆる討ち合いのことだ。幼少の頃より、夕紀にとつて遊びといえば暁や父親との剣術特訓。更に厳密に言つなれば喧嘩だ。

暁としても、最近は交流会に向けて猛特訓に励んでいた大切な幼馴染みを労い、何かご褒美をあげたい気持ちは山々だ。ただ、今は場所と相手に難が有り過ぎる。

「村に戻つたら好きなだけ『遊び』に付き合つてやる。あの程度の奴らを相手にしたところで体力の無駄遣いだよ。」

「そつか… そうだよね、じゃあ行こ 日暮城にレッツ、ゴー。」  
あつさり機嫌を直し、握り拳を天上へと突き上げるジェスチャーをする幼馴染みに呆れ半分、安堵半分の笑みを返しつつ暁も身を翻す。

二人の後方には、いつの間にか起き上がつた、言葉ひとつ無いまま虚ろに佇む兵達。

彼らの脳裏には、声が響いていた。

『…なニヲシているノ? 黒翳の歴史ヲ阻害するヤツは、  
排除シテシマハ。 タア』

兵の一人が弓矢を握つた。鈍く光る薄汚れた矢尻が、遠退く背中に向けられる。

「……でさ、その時も夕紀が自主練習バックで勝手に遊びにいつて。夕紀のお父さんが超キレて~」「うるさいうるさい覚えてない

知らない。てか黙れ「

夕紀は一抹の情けもなく暁の猫背氣味な背中に蹴りを入れる。

「痛。酷えな」

「ムシャクシャしてやつた。反省する気は微塵もない。まあ、スンマセーン」

「……いっそ、清々しいくらいの開き直りだな……」

夕紀に向き直った瞬間、やや空を切り裂いてこじりひきに向かってぐる、鈍色の光が視界の端に見えた。

「夕紀……！」

声に押され、夕紀は思わず地に倒れ伏した。

暫くの静寂が満たす。

「……つ痛……おい何してくれやが…………」

怒鳴ろうと目の前に立ち塞がる人物を見上げた、その大きな瞳が僅かに見開かれる。

目の前で時折揺れるクリーム色の上着に、不自然に滲んだ染みを認めたからだ。

「暁！」

「……俺の前で夕紀を痛め付けよつとは良い度胸だ。その借りは全力で返す…………つ……？」

視界がブレ、一瞬暗くなる。口を開ける度に引き攣った音が漏れる。ヤバい、か……も？

そう思った刹那。さつきまで降っていた雨のせいか、少し湿った土

の感触を頬で感じた。

「暁…つ…？」

いつもの明るい憎まれ口が嘘のように悲痛に裏返った、大好きな声が曖気に掠れてゆく意識の中に響いた。

「暁ツ…！」

自分でも解るほどに涙に濡れる声。こんな時、思い知らされる。いくら普段強がつても、結局自分は非力だ。大事な人がこんなにも傷付いても、何も出来ない。止められない自責の念。

同時に、思い出した。

『あの時』も、そつだった。

世界は、決して居心地が良いわけじゃない。むしろ生きづらい。そんなことは解っていた。生来この身に穿たれた、不可抗力の足枷の存在に気付いた時から。

蹴飛ばすことが出来たなら、どんなに楽だつたらう。そんなどうしようもない妄想を繰り返している内に、また一日が終わつてゆく。辺りを見回してみる。既に室内には他に誰も居ない。少女は一人、茜色の空間に佇んでいた。その時、下校を促すメロディが流れてきた。

さて、そろそろ帰ろう。腐れ切つたこの世界の中でも唯一、こんな自分に笑いかけてくれる『あのひと』が待つ場所へ。

見渡す景色のすべてを飲み込んでゆく紅い光をクリーム色の布で勢い良く斬り捨て、立ち上がる。

その瞬間。茨か何かが絡み付いてくるかのよつな、些細ながら鬱陶しい痛みを覚えた。

痛い。この痛みがいつまでも私を縛り付ける。

だけど、あのひとだけが認めてくれた、私という存在が確かに在ることを示す象徴もある。

だから、この痛みを。私は守るよ。

ため息ひとつ溢し、少し乱れた椅子と机に手を付き立ち上がると、少女は覚束ない足取りで歩き出した。

「富廷警備隊の皆さんが駆け付けて下さったから良かつたものを…。夕紀、お前は一体何をやつていいんだ!!」

夢から現に戻つてくる中で、まずは夕紀父の怒号が聞こえた。

「……。」

「おい、聞いているのかお前は…」

物言わず、いや言えずに黙つていい夕紀を更に殴り付けるように、怒号が一際大きくなる。俺を心配してくれてのことだ、って…そりやあ解つてはいるけどさ。

「……んな、怒…な…こ…で…下…こ…よ…タ…の…父…セ…」

「暁!!」

「あ、傷口開きたくないなら起きちりやダメよ~。」

穏やかな声が起き上がろうとした暁、暁に駆け寄りつとした夕紀の双方を制する。

「まあ…とりあえず暁くんが助かって良かつた。 けど…。」

安堵の笑みを浮かべようと表情を和らげた夕紀に、たしなめるような視線を流しつつ雷斗が呟く。

「 けど?」

「命は繋ぎ止められたけど、万全回復とまでは及ばなかつた。ごめん…調薬師として未熟な僕達にはこれが限界なんだ。しばらくは妖魔討伐も黒翳に殴り込みに行くのも控えた方が良い。 ていうか絶対禁止。」

いつもは伏し目がちな深いエメラルドグリーンが、他言を許さない搖るぎない一筋の光を呈している。

「そんな…。」

「どうすれば良いんだよ、と言ひ嘆きは声にならず、窓から流れ込んでくる風に溶けて消えた。」

「方法、無い訳じゃ…無いんだよ。」

「えつ！？教えろっ今すぐ…！」

「グエ…っ」

蛙が潰れたみたいな呻き声を漏らし、勢いに押されて数歩下がる雷斗。ついでに言うなら首が締まっている。

「とりあえず、雷斗の首を絞めてるその手をお離しなさいな夕紀ちゃん。教えて貢う前に雷斗が死んじゃうよ。」

「あ、ごめん…。」

夕紀が手を離すと同時に、雷斗は気が抜けたらしくその場にへたり込む。が、すぐに数回深呼吸して気を落ち着け、「　　僕達の集落と、東の方にある橋で繋がってる集落があるじゃん？呪術師と龍使いの人々の村。そこには、僕達の集落に生えてるのより格段に効き目の良い草花があるって。それで作った薬は、本当に良いらしいよ。でも、」

「今すぐ行つて貢つてくる…！」

「あ、ちょ夕紀、待てっ」

雷斗と暁の言葉を最後まで待たずして駆け出してゆく夕紀。茫然と見送る子供達の後ろで、怒りを通り越して呆れたというように夕紀父が頭を押さえ溜め息をついた。

「　　あ、あれ、あの欠陥人じやね～？」

数メートル後ろから、耳障りな幾つかの笑い声が茜色の緩い坂道を転がってきた。下校時間をずらしてやつたつもりだったけど、どうやら待ち伏せしてやがつたらし。こうなると、ヒジヨーに面倒く

されることになる。

「あ、本当だ<sup>マジ</sup>。」

「てか、ロボットていうか『リラッぽくね<sup>〜</sup>』？」

一拍置いた後、鼓膜を軋ませるような大爆笑。嗚呼、本当に面倒くさい…。そして、「ねえ、これから研究所にでも帰つてメンテナンスでもするの？それとも森？」

目の前に来たかと思ったら、そんな虚言を吐き散らす。もはや田課になりつつある事だ。なんていうか、まあ、この馬鹿達つて暇なんだな。

少女は、ただ静かにため息を吐く。その顔に怒りの炎や涙の雨などといった、表情らしい表情は無い。少しの間の後、少女はまた前を向き、おもむろに歩き始めた。まるで、背後で催されている雑音の多重奏など、取るに足らないとでも言つよう。

「…は？何、ため息なんか吐いちゃつてんの？」「マジウゼえし。」

少女が無反応だったことが気に入らなかつたらしい、二人の男子がビー玉ほどの大きさの小石を蹴つた。それは寸<sup>たが</sup>分違わず少女の両足に衝突する。「……っ。」

さすがに堪らず、少女の体は前のめりになつた。が、少女は頭から転倒しそうになるのを寸でのところで持ちこたえ、僅かに眉根を潛めながら白と水色の縞模様の長い靴下を下げる。

刹那、後方から再び嘲笑交じりの歎声が上がつた。

「お～来たあ～。損傷部分の修復ですかあ～？」

「道のド真ん中だけど大丈夫う～？」

そんな雑音を一切無視し、同時に感情の機能を停止する。傷付いたり泣いたりなんかしない。絶対に。

そつ自分に言い聞かせると傍のコンクリート塀に寄り掛かり、スカートの裾を軽く持ち上げて足首を見る。

まるで大海の波を模した様な、青っぽい曲線あざが少女の膝下から足首まで生じていた。

「うッわ、ヤツバ」「ちよーキモつ」

視界の端で何か言つてる馬鹿共を無視し、淡々と負傷の具合を確認することのみに集中する。この癌は生来のものだ。誰にどう嘲笑わいわいわれようが、どうしようもない。どうでもいい。

かつて、本来なら自分を慈しみ、守ってくれる筈の家庭はずから見放されたと知った時、私は全てを諦めた。涙も、怒りも、苦しみも、笑顔でさえも。何処かへ置いてきてしまった。

それらを取り戻せるのは、「あのひと」の傍だけ。私と同じ、冷たい闇を抱えたあのひとだけ。

毎日のように吹き荒すきぶ侮蔑の中で、「あのひと」が向けてくれる柔らかい笑顔や呼ぶ声だけが、ずっと私の道標ひかりだった。それは今も変わらない。

「……」

端から見れば禍々しい以外の何物でもないだろう紋様が刻み込まれた肌の診察を終え、少女は無表情のまま靴下を引き上げた。少しだけ赤みが残つていたが、この程度なら問題はない。前のめつていた

上体を起こす、『ぐく自然な仕草で膝に手を添える。』と、その

箇所に半透明の薄く細い帯のようなものが巻き付いた。かと思つた

刹那には溶けるように強き消えてしまった。少女の肌に残された赤

みも、同様に。

「…君らの稚拙な攻撃なんて、全くもって問題ないから。」

少女は努めて無感情な言葉を静かに紡ぐと踵を返し、空を焼く炎とそれをも飲み込まんとする青暗いの闇どが迫る坂道を掛け降りていった。

「……………ただいま」

家に着いた少女の目に真っ先に飛び込んできたのは、居間のソファーに寝転がりつつ何やら学業用魔導書、平たく言えば学校の実技系魔法の教科書を眺めている人物だった。

「…ただいま、蒼牙。」

「ん？あ、お帰り氷雨。」

柔らかい、落ち着いた雰囲気の微笑が向く。それを見つめ返すだけで氷雨の口元も僅かに緩んだ。今の氷雨の表情を第三者が見たとしたら、きっと我が目を疑ってしまうだろう。それくらい、普段の氷雨は笑っていない。唯一、彼

蒼牙の前だけだ。

「何、今度実技テストあるの？」

「そりなんだよ。先生がやたらと実技好きでさあ……」眉根をひそませて愚痴る蒼牙に近付き、肩越しに教科書を覗き込む。『敵方の攻撃を水の被膜<sup>ペール</sup>で防御する』というものだった。仮に敵襲を受けた場合、湖畔や清流、最悪の場合はそこら辺の水溜まりでも良い。とにかく水源さえあれば起動できる、極めて簡易な防御魔法だ。…思え

ばあの交流会の日以来、虹霓の至る学校で緊急時対応攻防魔法の訓練が徹底されるようになった気がする。

「…蒼牙、起動失敗して一人だけ『また』居残り追試…なんてならなければ良いね？」

「…ナンノコトカナ？」

「あれ？今の『間』は何かなあ？ていつか蒼牙、龍との意志疎通は上手いのに呪術苦手なんだね」

「そういう氷雨も龍との意志疎通苦手じやん。」

拗ねる蒼牙を見つめる氷雨の表情には、帰路の無感情な聲音と瞳が嘘のように、紛れもない笑顔が浮かんでいた。緩く結んだ口元から、含み笑いに伴う吐息が微かに弾む。普通にどこにでも居る、その年頃の少女のようだ。

蒼牙と居る時間は、その瞬間だけは。

こんな自分も『普通』に生きることを許されるような気がした。

それまでは、あまり、受け入れられない存在だった。どうやら周りにとつて私は、出来れば自分達の目の届かない所に投げておきたい、だけど見ているとある意味で面白い存在だったらしい。そもそもそうか。滅多に居ないからね、生まれつき足にへんてこりんな紋様がある人なんて。更にその足には、まるで紋様に縛られているかのように軽度の機能不全。まあ日常生活では別に困らない程度だけ

忌みの念を抱かれるには充分すぎた。

親戚には「あの子が身内だなんて恥ずかしい」とか言られて。学校に行く年齢になれば当然、周りに見せ物みたいにされた。ふざけんな。私が何したっていうんだ。…なんて思いも、いつしか薄れていった。

感情を殺して自分を守る術を得たのは、その頃だ。そして、「本当」

の家族から捨てられたのも。

あの日。いつも通り学校が終わって、「じけやじけやつるそこ奴らをいつも通り無感情にあしらつて辿り着いた家には、…正確には家の跡地には、所々破れ、それを繕いもしていないままの衣服袋と、申し訳程度の金が置いてあるだけだった。噂によれば、ご丁寧に自分が学校に行つた隙に何処かに消えたらしく。今さら真実を知る術は無いけど。

その後はあまりよく覚えていないけど、…まあ孤児院にでも居たんだろう。暖をとる」とは出来たけど、数十の冷たい眼に晒されたんた気がする。

そして紅葉が枯れ葉に変わり、枯れ葉が雪に埋もれて朽ち果て、その雪も柔らかい白い光で溶けていった頃、……………今の家に引き取られた。漆黒の髪とこの村にある大きな湖と同じ色の瞳を持つ、三歳年上の男の子にも出会つた。それが蒼牙だ。

間もなく、蒼牙も私と同じような境遇だと知つた。その日から私達は一緒に生きてきた。…願うことは唯一つ。もう一度と、この、<sup>ぞく</sup>蒼<sup>か</sup>牙との『普通』の日常を失くすことの無いように…。

「…め、氷雨ッ」

肩に軽く食い込んだ爪の微かな痛みで、氷雨は我に返つた。

「…蒼牙」

掠れた声でその名を呼ぶ。すぐに、ニヤッと笑つて髪を撫でてくれた。石鹼の香りが暖かい手と共に触れる。それだけで気分が和らいでゆく。

「大丈夫か？」

「あ…うん。ちょっと、思い出してただけ…。」

蒼牙の表情が一瞬、固まつた。

「…大丈夫だよ、蒼牙っ。もう、どうでも良い事だから。」  
取り繕つて「アハハ」とか言いながら重い口角を引っ張り上げた、  
その時だ。

不意に眺めた窓の外に、野獣並みの全力疾走で駆けてくる女の子と、  
その女の子を追い掛ける白い狼みたいな生物が見えた。  
スピード

## 1.1 満夜の田論見（前書き）

「満夜。出来たぞ。」

組んだ膝に置いている古文書から視線を外して顔を上げると、其処そのに冬司が立っていた。

「出来たって、何が？」

満夜が問うと、冬司は『ガクツ』といつ擬態語を体現したようなジエスチャーを繰り出した。なんだか、よく訳が解らない。

「…ほら、前に『役立つもの作つてやる』つって、お前から虹霓の宝冠についてた宝石預かつてたじやん。アレ、出来たぞ。」

「……あ、ああ！ あれか！ 本当に…！」

「…忘れてたのかよ。」

やれやれ…と肩をすくませ溜め息を吐く。満夜はその方を睨み付ける。

「…はいはい悪かった失言だった。謝るから。…これ、渡しとくよ。」

満夜は渡されたものを繁々（しげしげ）と見つめる。

それは鏡だった。しかし、不可解な点がひとつ。通常ものが映る箇の部分が例の黒い宝石で作られていて、とても本来の役目を果たせるとは思えない。

「え？ 何これ。なんでミラーが黒いの？ 映んじゃないじゃない。」

私だってこれでも年頃の女の子なんだから、お洒落にはそれなりに興味あるんだよ？ プрезентしてくれるのは嬉しいけどもう少し考えてよ。……というような心情が、満夜の表情からは容易に見てと

れた。

「えつと…」これは化粧する時とかに使つんじゃなくて。鏡=化粧道具の一つ、って觀念は一回、頭ん中から除外して。」

「え？」<sup>かれ</sup>

一体、冬司は何を言つてゐるのか。本氣で訳が解らない。

「これはな、人の心の闇を映し出す特別な鏡なんだ」 「…へえ」

「そんでもつて」

冬司は足元に置いていた、鳥獣飼育に使われるようなケージを持ち上げて見せた。数匹の鼬がゲージの中で蠢いていた。煌々と燃えているかのような紅い瞳が、ジッと満夜を捕らえる。

冬司はその中の小柄な一匹を掌で包むようにして抱き寄せ、

「満夜、鏡を仰向けでそこのテーブルに置いて。」

満夜が言われた通りにすると冬司は鏡の上に鼬を置いた。すると、鼬はまるで餌を貪るように鏡をペロペロ舐め始めた。

「可愛い〜。…でも、そこには餌なんか無いよ？」

鼬の頭を撫でつつ、満夜は鏡を見つめる。そして、その瞬間息を呑んだ。

「…………どうだ満夜。驚いた？」

冬司が得意気に笑む。満夜は相変わらず瞳を大きく見開いて固まっている。

闇を映しているだけだった筈の鏡に、線の細い長い黒髪の少女

夕紀が映つていた。

「この子は、虹霓の…。」

そう呟きながら鏡に降れると、黒髪の結構カッコイイ少年、何故か瞳がエメラルドグリーンの少年、赤茶色の髪をツインテールにしている美少女…などと次々に映つていった。

「そこに映るのは虹霓の中でも特に心に暗いものを持つている人。…そして、虹霓の宝冠の宝石に秘められた各々のチカラの『器』となる、言わば『選ばれた』人だ。…黒翳の再建を目指すにあたって、俺達の駒にも脅威にもなるかも知れないな。あと、鼬らは鏡に映る人の心に巢食う『暗いもの』を食うのが好きなんだ。下手な飼育をするより格段に強くなるしな。…黒翳の再建も、鼬らがどう成長するかも、全ては満夜が鏡をどう使うか…、だ。」

鼬をゲージに戻し、冬司の靴音が廊下の闇に溶けてゆく。鼬達はキイキイと鳴きながらそれを見送る。

満夜はとすると、微動だにせず、食い入るように鏡を見つめている。

その顔には笑みが浮かんでいた。

## 11 満夜の目論見

窓の外をもつとよく見よつと田を凝らした時、不意に、誰かに名前を呼ばれた気がした。

訝しげな表情で氷雨は外に出た。金木犀の香りを含んだ風が、頬を撫でて通りすぎてゆく。

誰も居ない。おかしいな、何か、誰かに呼ばれたよつた気がしたのに…。首を傾げながら辺りを見回し、耳を澄ませる。だが、清流が流れゆく水音、木の葉が擦れ合いざわめく声が小さく聞こえるのみだ。

溜め息をつき、再び家中に入ろうとした、瞬間。「あなた、

氷雨ちゃんだよね？」

「…っ？」

声の方に視線を投じる。艶やかな黒髪ショートカット、その黒髪よりも更に濃い色の瞳を持つ少女がこちらを見ていた。知らない子だった。氷雨は無意識に足の向きを換え、極力見られないようにする。そして、努めて平静を装いながら

「あなた、誰？」

「満夜。…安心して。私は氷雨ちゃんの味方だよ。」

そう言つて微笑む満夜。「いや、見ず知らずの人に『味方だよ』とか言われても簡単には信じられないし。」

…と言つわけにもいかず、氷雨は曖昧に頷く。

「ねえ」

声のトーンが微妙に変わった。氷雨は僅かに眉を潜める。

「…何か？」

心根では僅かな抵抗を抱きつつ、ゆっくりと満夜に向き直った、

「ねえママあ～。何でお姉ちゃんの足、あんなへんてこりんなの～？」

「しつ、やめなさい…！聞こえちゃうじゃない。」

…どうやら通りすがりの親子連れらしい。氷雨がちらりと見やると、母親はあるで異形の者を見たかのような顔をして形だけの会釈をして、子供に「良いからこっちにいらっしゃい」とかお決まりの台詞を仕いて足早に去つていった。

…良いよ、別に。どうでも。

遠ざかる大小の背中を漠然と眺めながら、溜め息が零れる。

「……ああこいつのひって、むかつくよねえ…。」

「…え」

振り向くと満夜が腰に手を当て、頬を膨らませている。

「だつて、なんで外見でしか人を判断出来ないんだ、ってマジ苛つくもん。」「…別に良いですよ。もう慣れた。第一、満夜ちゃんには関係ないことでしょう。」

「良くな～よ！…友達を悪く言わてるのに見逃せる訳ない。」

そう言つと満夜は氷雨に抱き付いた。そして事態を飲み込めず固まる氷雨の耳に唇を寄せ、

「例え嘘とちよつと違う所があるとしても、だからって私は氷雨ちゃんが周りから馬鹿にされて良いとは思わない。……思い出して？今までの日々を。足に痣があるからって謂れのない差別受けて、家

族に見捨てられて。心の均衡を保つために感情を殺したりして耐えて。』

氷雨は頭を押された。

『お前は我が家の恥さらしだ』『お兄ちゃんが学校でいじめられるのは皆、あんたが悪いのよ』『ねえ、なんで足にこんな模様があるの? ヘンなの〜ツ』『お前つて足が変だし表情変わんないし口ボソトみてえ』『いや、ゴリラみたいの間違いだつた。なんでゴリラがここに居んの? 森に帰れよ。あはは〜!』

「うるせー!..」

ありつたけの声で叫んだ。刹那、急に脱力感が大きな波となって覆い被さってきた。次の瞬間には不可視の手で前後に強く揺さぶられたような衝撃。

氷雨はフツと意識を失った。

コントロールが出来なくなつた体が前傾してゆく。

「氷雨つ

腕を引っ張られ、氷雨の体は今度は後ろに傾く。そして、しつかりと抱き止められた。蒼牙だった。氷雨の甲高い叫びを聞いて飛び出してきたのだひつ。

「氷雨つ、大丈 .....

言いかけた言葉を飲み込み、髪を透いて小さい体を包み込む。

氷雨の頬には一筋の涙が伝っていた。

「思つた通り。氷雨つてかなり精神弱いんだね…。」

黒い龍の背に寝転びながら、満夜は移ろつ雲の流れを見つめる。脇に置いた例の鏡の上には鼬が一匹、鏡を舐めている。

「可愛い君達を育てるには打つてつけ。ねえ？」

頭を撫でてやると鼬は気持け良さうに瞳を細め、キイー、と鳴いた。

「…でも氷雨だけじゃ足らないよね…闇は深いけど、なんせ不眞の上に小柄な女だし。次は、もっとお腹が満たされる相手にしないとね。どうせなら男が良いかな」

『そうだ』、と返事をするかのよつて鳴く一匹を膝に乗せ、上体を起こして眼下を見下す。

「…ん？」

調薬師の村と魔術師・龍使いの村境で、何やら門番と揉めてる少女が見えた。彼女の足元には白っぽい犬が付き従い、呆れたように尻尾で頭を押さえている。

背中まで伸びた長い黒髪。見覚えがあつた。

「ちよつとゴメンね」

鏡に乘るうとしていた鼬を退かし、鏡を田の前に持つてくる。鼬が不満げに鳴く。

「すぐ返すよ。悪いけど一瞬、貸してね。」

優しく諭すと鼬は渋々といった感じで頷く仕草をし、暇潰しに仲間

と遊び始めた。

「うん、良い子だ。」

そう言いながら鏡を、現在進行形で門番と揉めてる少女に向ける。すると、すぐに真っ黒い平面に少女の顔が映し出された。そうだ。数時間前に冬司に鏡を貰つた時に映つた、あの子だ。そつと鏡に触れると胸部に黒い穴『闇』が出現した。

「…男でなくとも、充分かも。」  
にやり、と瞳を歪ませる。

「…あれっ？」

更に不思議な事が起こっていた。鏡に映る少女の隣にもうひとり、黒髪のかなり格好良い少年が映つていたのだ。しばらく眺めていると、やがて2人の姿が、胸部の黒い穴がぴつたりと重なった。

「…一人の共通の闇ということか…。興味深いね」

楽しげに弾んでいるよつで、どにか冷え冷えとした咳きは黒い龍の咆哮に焼き消された。

「…再度確認するが君は入村許可証を持つていないんだろう？残念だが通す訳にはいかない。親御さんから貰つてきてからまた来ると良い。」

「私の幼馴染みが大変なの！今回だけで良い！！早く村の薬が欲しいのっ！」

「だから、入村許可証がなければ駄目なんだよお嬢さん」

「こんな感じの会話が、もうかれこれ約十日前から繰り返されていた。

『コウキ～コウカといっしょに一回、村にもどる？門番さんダメだつて』

「嫌！暁の命が掛かってるんだー早く……入らせろ！」

「……………」

門番を殴り飛ばしても強行突破しようとしていた夕紀の体が宙に浮いた。…というか荷物か何かのように担がれている。

「何してるんですか夕紀さん。……………」

「あ、すみませんねえ門番さん。

妹が…。」

「直兄！…でかどういう扱いだコラ！お～る～せえ～。」

足をばたつかせて無駄に足搔く夕紀を、その人物は苦笑混じりに見つめる。夕紀の実兄、直樹なおきだ。歳は一七歳。

『ナオキだつ！わあい、ひさしぶりナオキ～。』

「久し振り。相変わらず元気だな紅靈。」

『ねえ、サオンは？』

「あ、そういうえば咲音さん居ない…。どうしたの直兄？また喧嘩ですかい？」

「してません暁くんを看てくれてるんだよつ」

自然に口角が上がるのを必死に押さえつつ何故か滅茶苦茶早口で告げる。『咲音』は暁の姉だ。無邪気な笑顔と底抜けに明るい笑い声が印象的な女性である一方、退治屋としての姿勢も直向ひたむきそのもので、何かあれば誰よりも俊敏かつ的確な行動力を發揮する。

…そんな人が何故、兄の恋人の座に最も近いと噂されるか、夕紀には到底理解出来ない。…夕紀さん、何か仰いましたか？

「いいえ何にも。」

「…まあ良いか。」

まだムスッとしている様子を見るに、心底納得している訳では無さそうだが、そこは年長者。夕紀とは違い、我を忘れて勢いのままキレたりはしない。

「…ほり、行くよ。薬貰つたでしょ。」「あ、はあこっ」

直樹が通行許可証を提示したことで、ようやく門が開く。あとま、この村から良い薬あることは薬草を搔つ払つだけだ。

「てこいつ世間は甘くなかった。

「7000000000ウイング…。 どんだけ高いんだー買え  
るかっ！…。」

「…すまないがこの草は貴重だから値は変えられん。悪いねお嬢さん。」

お田端でだつた薬草を呑き付け吠える夕紀を前に、店主は半ば面倒臭そうに告げた。

「てか、こいつ魔術師とかの村でしょ？こいつ創造なり倍増なり出来るのは奴居ないの？」

素朴な疑問。 の、筈だった。

「…おじさん？」

眉根を潛め、口を結んで喉から低い声を出す店主。 …なにかマズイ

ことでも言つたのだろうか。

「…居るつむや居ぬけだよ…。」

「え、本当にー。」

「ただ、俺は其処に行きたくねえからな。路みちの図は書いてやるから自分で行ってくんな。」

そつ言つとメモ用紙を取り出し、大雑把な地図を書き付け、「…は  
い。」

「あ、ありがとう」「う

戸惑いの色を微かに滲ませつつ、メモを受け取る。

「…そんじゃあ

店主の背中が店の奥に消える。それを漠然と見送る夕紀の耳に、直樹の「行こう」の声が何故か遠く聞こえた。

それから徒歩で約十分。

夕紀と直樹、そして紅霞の前に現れたのは『ぐく普通の一軒家だつた。魔術師の家』といふことで、『いかにも不気味つぽい洋館で所々に茨のツルが巻き付いている』とこう様なものを密かに想像していた夕紀は小さくため息を吐く。

「…で、どうすんの？」

「くつ？」

「入らないの？ いつまでもこんな所に突っ立つてたら不審者極まりないですよ～？」

「な、直兄から入つてよ。」（どうぞ）「…」

「へえ～夕紀さんもそういうこと言うんですね？ 今まで、ボクのこと田上だと認めたことないと思つてたけど。」

「うん、思つてない。」

「否定しないのかよ！」

「…あ、あの…どうしました？」

兄妹喧嘩（わいわい）を遠慮がち制する声がした。ふと見返ると、直樹までは及ばずとも夕紀よりは年上と見える少年が、やや堅い笑みを湛えて家の前に出てきている。

「あ、あの、僕達は退治屋…討魔士の村の者なんですが、仲間が普段の怪我よりも少し重い負傷をしてしまって。この村に効き田の良い薬草があると聞いて来たんですが、ちょっとお高くてですね…。」

こちらに、比較的安価で薬を作ってくれる魔術師さんがいらっしゃると聞いて来たんですが…。」

「あ、はい。僕らです。」

「僕『ら』?」

「妹も居ます。父や母は今、宮廷の方へ行つて王族の方との話し合いで行つてるので不在なのですが。…あ、外は風が冷たいし、どうぞ入つて下さい。」

「お邪魔します…。」

家中に入つた途端、暖房器具は一切見付からないにも関わらず季節が逆戻りしたかのような暖かさに包まれた。そのことについて触れてみると、

「…ああ、妹のチカラですよ。この季節は寒暖差が激しくて嫌だから家全体の室温を適温に調節して貰つてるんです。」

「そういうや、その妹さんは…。」

「なんだか体調悪いみたいで、今は自室で横になつています。あの…僕は妹ほど製薬とか呪術合成とか上手くないんですけど…、済みませんが僕がやらせて頂きますね。」

「…いいよ、蒼牙。私が作る。即癒剤そくゆきでしょ?すぐ出来る。」

「氷雨」

振り向くと、寝起き直後と分かる少しクセのついた肩くらいの髪少し青みがかつた灰白色の髪を持つ少女が二階の階段から少し足を引き摺るようにしながら降りてきた。

かなり小柄で、顔立ちにも夕紀以上の幼さが残つていて。だが、その表情は異様にクールで、とても年下という風には見えなかつた。

「…すぐ作るのでちよつと待つて下さい。」

「あ、はい。」

「ありがとう。」

一人の返答を聞くと氷雨は身を翻し、『製薬室』というプレートが掲げてある一室へと向かう。…その刹那、ふと足を止め、「…あ、そうだ。蒼牙、龍達には『飯あげた?仔龍達が上階でワンワン泣いてたよ。」

「あ、やっぱ…。」

「早く食べさせなよ。私が『飯あげても怯えて食べようといしないんだから。」それはあなたが無表情過ぎるからじゃない?と、夕紀は思う。

「…何か?」

「え、イヤ…何も。」

「……まあ良いか。では少しお待ち下さい。」

氷雨の姿が扉の向こうに消える。

「…さて、僕もちょっと、龍達に『飯あげてきますね。』

「はい…あ、聞きたいんだけど龍つて…あの、伝説上の動物の?」

「ええ。」

「凄いなあ…本当に居るんだ。僕は退治屋として沢山妖魔を見てきたけど、龍はさすがに見たこと無いですね…。」

興奮を抑えつつ噛み締めるような、僅かに掠れた声で直樹が呟く。

「よひしかつたら一緒に『飯あげに行きます?』

「えー良いの、本当に。」

「はい。全然大丈夫です。」

「やつた、決まりつ!案内して!ほら直児行こう。」

一気にテンションアップして無邪氣にはしゃぐ夕紀。

製薬室の中にまで響くその声に聞き入りながら、氷雨はどこか虚ろな眼差しで合成装置を稼働させた。

頭の片隅で声がする。

『氷雨ちゃん、あなたも手伝ツてくれるヨね？一緒に私達ノ理想郷を造口づへ。』

「……うん。」

『うみやああ～！』

『お腹空いたあ～』

『蒼牙のばかあ～！』

部屋に一步足を踏み入れた瞬間、鳴き声の大合唱が一際大きくなつた。耳を塞ぎつつ片目で見やると茜オレンジ、萌黄みどり、桜花ピンク、蒼海色等々、色鮮やかな体色の小さな龍達が三、四匹、床に座り込んだり歩み寄つて来たりしながら空腹に耐えかねて泣いている。

「ハイハイ…。謝るから泣くなつて。」

言いながら、蒼牙は龍達のご飯が入つた布袋を床に置く。次の瞬間、ご飯皿に入れられるのを待たずして仔龍の一匹が袋に頭を突つ込み、がつつき始めた。

「ほり、落ち着けって。ちゃんと一人ずつ分けてやるから。」

『お腹すいたの～。』

『お前、ちょっとワガママだぞっ！ほく達だっておなか空いてるんだ。』

『う、うるさいって！えいっ！』

『痛い…。何すんだよ…。お返しだつー。』

最初に駄々をこねた一匹と、その一匹に注意を促さうとした別の一匹との間に険悪なものが一瞬、鋭く瞬き、呑き合いくつ変わつていつた。

「…」

「…」

「…」

『蒼牙…。』

『…ごめんなさい。』

「解れば良し。今用意するから、早く！」飯食べな。」

傍にあつた低いテーブルに一匹を乗せ、餌を持り上げる。

「…貴女方、ご飯あげてみたいんでしょう？」

「へつ？」

「どうぞ？」

そのまま餌が入った袋を託された。夕紀は皿を白黒させて暫し固まる。

『おねえちゃんお腹すいたよ～。』

「あ…うん、ごめん。」

幾つかの餌入れに、なるべく均等になるよう注意しながら餌を入れてゆく。

『 いただきます 』 × 四の可愛らしき声が鼓膜をくすぐり、思わず笑みが零れる。

「あの子達、本当可愛いね～直兄、蒼牙君。」

『 紅霞の方が可愛いもん…。』

足元を見やると、その場に居るに閑わらず先程から全く会話に入れなかつた紅霞がふて寝し、ひとり小声で毒づいていた。

「はいはい…拗ねないでよ。紅霞も可愛いから。」

背中から尻尾にかけて優しく撫でてやる。

「さて、餌はあげたし、妹もそろそろ作り終わる頃だと思つから下に降りて……。」

蒼牙が最後まで紡いだとした刹那、「ボンッ」というくぐもつた小さな爆発音と何かが床に落ちた音がした。

「氷雨っ」

「あ、の…つどうしたのっ？」

「大丈…」

三人は一様に息を呑んだ。先程、ちらりと見えた時には典型的な『 片付いた部屋』という感じだつた製薬室の床はまるで何者かに荒らされたかの様に、製薬説明書やら薬草やら、薬草を煮る水やらが散乱してしまつている。

「ええ。私は大丈夫。ご心配お掛けしました。」

こちらを振り向かないまま、いたさか冷やかにも感じられる平静な声が返ってきた。

「良かつた…って氷雨、手！」

蒼牙の声に弾かれるよつて夕紀と直樹も氷雨の手を見て、声を失つた。

氷雨の左手は赤く腫れ、霧が垂れている。恐らく合成装置の中身が漏れたりしないように庇つたのだらう。

「…眞慌ですぎ。」

「だつて、火傷が…。」

「戯れ言を。」

短く咳き、負傷部に触れようとする夕紀の手を払いのけ、反対の手を負傷部にかざす。刹那、負傷部が淡く瞬いて傷は瞬時に癒えた。

「…凄い。」

「そんなことよつ…。」

氷雨が振り向き、不思議な色合いの双眸が夕紀を射竦める。

「私ではなく幼馴染みの方の心配したらどうですか？」  
今も、あなたは私が火傷した部分に安易に降れようとした。そうやって咄嗟の行動や感情、思い付きに任せたりするから最終的にあなたではなく周りが痛手を負うんだ。結局は迷惑をかけているだけ。

夕紀が小さく息を呑んだ。

同じようなことを『あの時』も言われたんだ。一瞬、足元が揺らいだ気がした。

「夕紀…つ。」

直樹はようめいた夕紀の肩を支え、視線を氷雨に戻す。そして、言った。

「……氷雨さんじゃないよね。あなたは、…………誰だよ。」

刹那。夕紀達の田の前に立つ氷雨から『氷雨』が消えた。顔立ちに何か変化があつたわけではない。だけど、「違う」。

「……ふふつ。……初めまして、黒鷲国再榮を田標に頑張つてる軍隊の最高指揮者をやつてる満夜です。」

氷雨を通して不敵に笑う満夜。夕紀は手のひらに爪を食い込ませて歯軋りする。もともと短い夕紀の堪忍袋の緒はとっくににブチ切れしており、本当は今すぐにでも組み伏せて殴り付けてやりたい衝動に駆られている。が、そんなことをしたら罪の無い氷雨をボコボコにしてしまう。たとえ短絡的思考の持ち主である夕紀でも、それはさすがに気が引けた。

そんな、口との葛藤に苛立つ夕紀の心情を知つてか知らずか、氷雨みやは言った。

「え、突然ですが只今より、あなた方の国、虹霓に宣戦布告…は言い過ぎだけど協力要請したいと思いま～す。虹霓国の秘宝である宝冠、正確には宝冠に嵌められてる宝石を渡して下さい。もちろん宝石に『選ばれた』人もね。良いつて言つまで続けますからね～？…んじや、またね～。」

「…………うおつと、氷雨つ……」

ようめいた体を蒼牙が受け止め、「とりあえず…。」

後ろにあつた白いソファーに寝かせる。

「　　あ、お一人共すみません。え~と薬は…出来てますね。は  
い、」ちらです。」  
「あ、ありがと…。」  
「ありがとうございました。」

敬愛の意を含む微笑を交わした後、夕紀と直樹、そして紅霞は夕闇の迫る帰路に着いた。一方の蒼牙も窓辺に寄りつつ一人と一匹の後ろ姿を見送る。

一同の耳には氷雨の姿をした満夜の、あの耳障りな笑い声が張り付いて一向に薄まらずにいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7591x/>

---

とある王国に巡る運命(もの)

2011年12月17日19時49分発行